俳句の本質は滑稽なり

日根野聖子

現代、我々は、五七五の定型で季語、切れのある句を、「俳句」と呼ぶ。しかし、そもそもその「俳句」とは何ぞやと問われ、今や、俳句の本質を語れるのは、滑稽俳句協会の会員とごく限られた俳人、学者と研究者のみである。何故なら、俳句のルーツは室町時代末期に起こった俳諧にまで遡るのだが、その俳諧の字義そのものが「滑稽」であることの意味を、ほとんどの人は分かっていないからである。俳諧の「俳」も「諧」も滑稽、戯れ、おかしみを意味し、俳句の最も重要な本質は、滑稽なのである。

明治時代、「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」（獺祭書屋俳話）と言って発句を俳句と呼び、連句をばっさりと切り捨てて俳句を近代化しようとしたのが、正岡子規である。残念ながら、子規は、幽玄高尚な句が清酒なら、滑稽のある句は濁酒だとして、滑稽を決して高く評価しなかった。しかし、それにもかかわらず、滑稽の意のある「俳」の字を用いて、子規がわざわざ発句を「俳句」と呼んだのは、一体何故か。

子規から遡ること江戸時代、かの芭蕉も、俳諧における哄笑性や滑稽性、遊戯性を第一に提唱することはなかったが、否定することも決してなかった。むしろ芭蕉の俳諧人生は、それらをいかに文学として高いものにできるかに苦心した一生であったといっても過言ではない。芭蕉は、和歌の雅に対して俳諧の俗をいかに扱うか、俳諧に高い芸術性をもたらし、文学の中で和歌と同じような地位に高めるには、滑稽をどう扱うべきかを追求し続けたのである。こんなエピソードが残っている。弟子の去来に、発句はどのように作ったらよいのかと質問されて、芭蕉は「発句は、句つよく、俳意たしかに作すべし」（去来抄）と答えている。俳意とは、まさに滑稽味ということであり、滑稽のある句をつくりなさいと答えたのである。そこで去来が、“夕涼みをしたら体が冷えて持病が痛み出し、慌てて家に帰った”というおかし味のある句を詠んでみせると、こういう可笑しさとも違うけれどと言って、芭蕉は大笑いしたというのである。このことからも、芭蕉は滑稽というものを、芭蕉なりの定義をもって非常に大切に考えていたことが窺知される。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

　芭蕉しかり、子規しかり、俳句に芸術性を求め、文学における俳句の地位向上を目指した。そのため、いずれも滑稽に条件をつけ、滑稽のみを強調することには慎重であったが、滑稽を否定したり切り捨てるようなことは決してなかった。それは何故なら、俳諧の起こった歴史からしても、俳諧、俳句が、雅のみを追求してしまったら、和歌・連歌と同じ世界を扱うことになり、文学の一つのジャンルとして存在する意味自体が無くなってしまうからである。芭蕉も、子規も、俳句の本質に滑稽があり、それを否定することは、俳句の存在意義そのものを否定することになるのをよく分かっていた。だからこそ、安直に滑稽を否定したり切り捨てることは決してしなかったし、できなかったのである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。